

複言語サポーターの言語使用—インタビュー調査から

The language usage of plurilingual supporters
An Interview survey

徳井厚子, 信州大学
Atsuko Tokui, Shinshu University

1. はじめに

現在、移動する人々が増加し、複言語サポーター（本研究では、外国にルーツを持ち、文脈に応じて複数の言語を駆使しながら地域や学校で外国人に支援を行っている者と定義する）も様々な場面で活躍をしている。

では、複言語サポーターは複数の言語を駆使しながらどのようにサポートをしているだろうか。本研究では、複言語サポーターが多様な文脈に応じて複数の言語を駆使しながら具体的にどのようにサポートをおこなっているかについて、複言語サポーターへのインタビューをもとに明らかにするものである。なお、複言語サポーターという名称は、個人の内部に複数の言語が複層的にまじりあっている状態や能力を示す「複言語・複文化主義」（西山、p32）にもとづくもので、多言語主義とは異なる概念である。

2. 研究概要

日本国内のいくつかの地域において、複言語サポーターおよび日本人コーワーカーにインタビュー調査を行った。インタビューは半構造化の方法で行い、支援の内容、支援のコミュニケーション、仕事に対する思い、問題とその解決、悩み、周囲との関係、複言語サポーターの役割の可能性等を中心に自由に語ってもらった。インタビューは日本語で行い、一人 30 分から 1 時間半かけて行った。インタビューを行うに際し、研究成果の公表にあたっては本名を公表せずアルファベットもしくは仮名という形を用いること、本人であることが推測できる情報は記載しないこと、本人の話したくないことを聞かれた場合には、話すことを拒否する権利を持つことを条件にし、事前にインタビューからの許可を得た。研究の手法にはトライアングレーションを用い、複言語サポーターの他、コーワーカーの日本人サポーターへのインタビュー、複言語サポーターの活動場所でのフィールドワークを行った。尚、対象者は地域の国際交流団体等や労働局等の機関や学校等で支援を行っている。

当報告では、インタビューデータから、複言語サポーターの言語使用について語られた語りを取り上げ、考察する。

3. 分析結果と考察

3-1. 言語使用の多様性

まず、場面ごとや内容によって言語を使い分けているという語りが見られたが、これらの言語使用の使い分けの基準は個々の複言語サポーターにより、異なっていた。

小学校で外国籍児童の支援をしているブラジル出身の F は、「授業中」「授業外」という場面によって日本語と母語のポルトガル語を使い分けているという。F は、「授業中は日本語で支援、授業を離れるときに、ポルトガル語で話をするようにしている」と述べている。具体的に授業外ではどのようなコミュニケーションを行っているかについて、F は、「雑談もあるし、〇〇したい、〇〇で遊びたい、遊びたくないのかどうなのか 家のことを話したり親がどうしたとか妹がどうしたとか何を買ってもらったとかそういう話をする」と具体的に述べている。授業中は日本語だが、授業外では当事者の要望や日常的、個人的な話題等の雑談について、当事者と母語を用いながらコミュニケーションを行っていることがわかる。授業外の場合、授業中のように「日本語を話さなければならない」という状況から解放されることも影響しているのではないかと考えられる。

一方、地域の日本語支援機関で外国籍児童の学習支援をしている在日韓国人の C は、内容や伝え方によって日本語と母語を使い分けているという。例えば、「喧嘩などのトラブル」「こみいった内容の場合」「正確に伝える内容がある時」は母語を使用し、「雑談の時」は日本語だという。「喧嘩」のように予定調和的ではない、様々な摩擦の生じるコミュニケーションでは、自分の考えや感情、事実が伝わらないと誤解を招いてしまう。誤解を解き、摩擦を解消する上では母語でのやりとりが必要と考えていることがわかる。また、正確に伝えることは摩擦や誤解そのものを防ぐことができるが、そのような時も母語を使用する必要があるととらえている。こみいった複雑な内容の際も、丁寧に内容を伝えていくためには、母語を用いる必要があると考えていることがわかる。

言語の使い分けの仕方や基準については、場面や内容による等、個々の複言語サポーターによって異なることがわかる。また、同じ「雑談」の場面でも F は母語、C は日本語を用いているように、複言語サポーターの言語使用の仕方は、個々によって、また状況や文脈によって異なっており、固定的ではないことがわかる。

3-2. 母語使用の場面

複言語サポーターの語りには、母語を使用してサポートするケースが多く見られた。

<感情や理由>

まず、感情や理由を述べる時に母語を用いるという語りが見られた。

中学校で外国籍児童生徒の学習支援を行っている中国出身の H は、「ふだんは簡単な日本語を使っているが、感情表現や理由を話すときは中国語を使っている」という。感情のレベルの表現は、第二言語よりも母語の方が表現しやすいと捉えている。また「理由」のように詳しく説明が必要な表現も母語の方が表現しやすいと捉えている。当事者が自分自身の言いたい内容や感情を表現しやすいよう母語を使用

しているといえる。感情や理由は誤って伝わると誤解を生じさせてしまう。感情や理由を細かく相手に伝えるためにも母語が必要と考えていることがわかる。

<他人に言えない悩み>

他人に言えない悩みを複言語サポーターに話す時に母語を用いるという語りも見られた。

小中学校で外国籍児童生徒への支援を行っているペルー出身の O は、「日本語ができて、自分の悩みを話すのは母語。担任の先生にも言えない内容の時は母語になる」と述べている。当事者は日本人の担任に言えない自分自身の悩み等を、母語を話せる複言語サポーターに話していたことがわかる。このように当事者の方から「話す内容」によって「話す対象」を選択しているケースもみられた。

<具体的なことの説明>

具体的なことを説明する場合に母語を使うという語りも見られた。Y は、具体的なことを説明する時は母語だという。「ほとんど電話でそのお話を聞いて、その答え、制度を説明してあげました。ポルトガル語でその制度を説明してできるだけハローワークにつなげたり、監督署につなげたり...」Y は、このように母語を用いながら相手の話を聞き、制度を説明し必要などころにつなげている。母語を使用することによって具体的な制度の説明が可能になっている。どのように支援しているかについては以下のように述べている。

「できるだけその話を聞くね。ポルトガル語で話聞いて理解できるように、わかるまで説明してあげるということをサポートした方がいいかなとは思うんです」「やっぱり聞くしかないね」

Y は母語で具体的な制度を説明する際にまず相手の話を聞くことが重要性であると述べている。そして、「相談の場において相手が理解しているかどうか」という状況や文脈を重視しながら母語を使用しながら説明していることがわかる。単に説明するという一方向的なコミュニケーションではなく相手が理解できるかどうかを重視した双方向的にコミュニケーションできることを重視している。

<不安や怒りを聞く>

不安や怒りを聞く場合に母語を使用するという語りも見られた。

Y は、「不安や怒りをやっぱり（母語で）聞いてほしい」と当事者の心理について述べる。具体的にどのように母語で相手の不安や怒りを聞くかについては以下のように述べている。

「みんな出して、時々私も理解できるように少し聞くこともあって、そして少しずつ整理していく。ゆっくり整理していったらそして理解を求めるということが。その相談の流れかなと思います。」

Y は、相手に（不安や怒り）を（母語で）「みんな出して」自分自身も相手の怒りや不安を理解できるよう聞き、整理し説明しながら相手に理解を求めるという。

当事者が不安を「みんな出す」ために母語を使用していることがわかる。Yは、相談という場の文脈の中で「相手が理解できているかどうか」を重視しながら、「相手が不安や怒りを吐き出す」「相手を理解する」「整理しながら説明する」ために母語を使用している。相手が感情を吐き出すことができたかだけではなく、自分自身が相手を理解することも重視している。

<母語を使用することの安心>

何名かの複言語サポーターの語りに「母語を使用することによって安心する」という表現が見られた。

医療通訳をしているブラジル出身のDは、以下のように述べている。「話すだけの相談の場合もある。自分は聞くだけ。さみしいのだと思う。安心してもらえればいい。大丈夫、と言ったりしている。」Dは、「さみしい気持ちでいる」当事者自身に、安心してもらいたいと語っている。

また、ブラジル出身の外国人サポーターのIは「母語によって相手が安心。相手が自分を出せる。」と述べている。相手が安心することにより自分自身を開示できるようになるという。雑談を母語でしていると述べているFは、「母語は安心の役割を果たしている」と述べている。母語を話すことは、当事者にとって安心するという意味を持っているといえる。

3-3. 両言語融合して使用する場面

複言語サポーターと当事者間の会話では、母語か日本語かの二者択一ではなく、両言語交えて使用しているという語りも見られた。

ペルー出身で小中学校での外国籍児童生徒の支援をしているOは、「日本生まれでも、日本語で話しても途中でスペイン語になったりする。」と述べ、当事者が日本語とスペイン語と混交させながら話していると述べている。一つの言語に固定するのではなく、状況や文脈に合わせて使用する言語を融合させながら当事者と複言語サポーターの間でコミュニケーションを行っていることがわかる。Oは、両言語混合して使用することについて以下のように述べている。「日本生まれでも、日本語で話しても途中でスペイン語になったりする。両方混ぜて話せるのが子供にとって安心できるようだ」。Oは、双方の言語を分けて用いるのではなく、混合させながら、状況や文脈に応じて変化させ使用しているといえる。その状況は一見不安定に見えるが、この不安定で混沌とした状況が当事者にとっては「安心する」状況であるといえる。

3-4. 言語レベル（表現）の調整

複言語サポーターの言語使用には、異なった言語の選択だけではなく、同一の言語内でのレベルや表現の調整も見られた。

前述のDは、当事者と調停員の間立って通訳をするとき、「わからないときはもう一度言ってもらおう」「簡単に言い直してもらおう」ようにしているという。複言

語サポーター本人ではなく、相手の言語表現について調整してもらうよう依頼している。「繰り返し」「簡単なスタイル」のように言語のレベルや言語表現の調整を当事者に依頼することにより、当事者同士がコミュニケーションしやすくなるよう側面からサポートしている。

ブラジル出身で地域の国際交流団体にサポーターをしている P は、「日本にいるブラジル人に対しては、わかりやすく、ストレートなポルトガル語を使うようにしている。丁寧なポルトガル語だと伝わらない」と述べている。相手の言語能力や特性を知った上で、相手とコミュニケーションする文脈を重視し、相手に通じる言語表現に調整している。具体的にどのように相手の言語能力に応じて調整しているかについて、P は以下のように述べている。「相談者によってもポルトガル語の言語能力が異なる。日本に働きにくる人にはポルトガル語が低い人もいる。文章を書けても、読んでわからない人もいる。こういう人に対応するときには説明は簡単にして、やわらかいポルトガル語で伝えるようにしている。」「ブラジルでの大学卒の人もいる。相談者に合わせてことばを選んでいる。」

当事者の言語能力は個々によって異なり、また4技能がバランスよくできるケースばかりではなく部分的な能力として身につけているケースもあるという。言語能力が低く、部分的にしか身につけていない場合には、「簡単な説明」で「やわらかい」ポルトガル語を使うようにしているという。そして相手の言語能力や文脈に合わせて自身の言語のレベルを調整している。

言語によって伝え方を調整するようにしているという語りもみられた。医療通訳のコーディネーターをしている S は、「コーディネーターが通訳者に依頼するとき、英語通訳者の場合はシンプルに、中国語通訳者の場合は長めに説明するようにと言語によって説明している」と述べている。通訳の際、言語によってその特質から簡素化したり長めに調整することで相手に正確に情報が伝えることができるよう、側面からサポートしている。

3-5. 当事者側からの調整

当事者がサポーターに合わせて調整しているという例もみられた。

ブラジル出身で地域の交流団体のサポーターである I は当事者がサポーターに合わせてスペイン語、ポルトガル語の2言語を以下のように交えて話していると述べている。

「スペイン語話者の相手はむこうの方で（こちらに対して）ポルトガル語を交えて話してくれる」

ポルトガル語話者の複言語サポーターである I に対して、当事者自身はサポーターに合わせて母語のスペイン語に加えポルトガル語を交えて話したという。サポーター側のみが当事者に合わせて言語を調整するのではなく、当事者自身がサポーターに合わせて調整しているケースといえる。言語調整は、サポーターと当事者の双方向で行われていることを示しているといえる。

3-6. 調整の限界と困難

以上複言語サポーターの言語使用について言語選択や言語レベル(表現)など相手や文脈に応じて様々な調整を行っているという語りについて述べたが、これらの調整は必ずしもスムーズに行われているわけではない。複言語サポーターの語りには、調整の限界と困難に関する語りも見られた。

医療通訳をしているペルー出身の T は、医者言葉を当事者に伝えることについての難しさについて、「相手の言葉を患者にストレートに言えなかった」と医者の言葉を当事者にストレートに伝えることの難しさについて述べ、以下のように語っている。

「研修を受ける前は、役割がむずかしかった。個人で雇われていると(例えば相手が友達の場合も含めて)、相手の言葉を患者にストレートに言えなかった。現場では暴言をはく場合もある。先生が「あと一ヶ月しかない」とストレートに言うときもある。」

相手と個人的な関係があると、「あと一か月しかない」のような医者の言葉をストレートに伝えることが難しいという。ストレートに事実を伝えなければならないが相手との関係性を考えるとストレートに表現するのが難しいという。これは友人としての立場と事実を伝える通訳者としての立場の二重の関係性の狭間でのジレンマによるものであると考えられる。

複言語サポーターは相手との関係性の中で仕事をしているが、時には医療の深刻な内容等ストレートに伝えなければならない場面など、相手との関係性を脅かさざるを得ない状況や文脈の中で相手とやりとりをしている場合もあることを示唆している。

4. まとめ

以上、複言語サポーターの語りから、彼・彼女らがどのように複数の言語を駆使しながら当事者をサポートしているかについて特に言語使用という点に注目して考察した。考察の結果、以下が明らかになった。

まず、複言語サポーターは多様な文脈に応じて複数の言語を使い分けているということが明らかになった。その使い方はドメインや目的で固定されるというのではなく、個々の文脈によって異なり、場面や時間でダイナミックに変化していくものである。

複言語サポーターの語りには、「感情や理由」「具体的なことの説明」「不安や怒りを吐き出す」等の場合に母語を用いるという語りが見られた。日本語では表現できない自身の感情や、正確に伝える必要があるとき等に母語を用いているのではないかと考えられる。また、当事者が「担任の先生に言えない内容」を母語で複言語サポーターに話すという語りも見られたが、母語を話せる対象を当事者が選択していると考えられる。母語の使用の理由について、複言語サポーターの語りからは「当事者にとって安心する」が見られた。

また、一言語のみを選択するのではなく双方の言語を融合して使用しているとい

う語りも見られた。「状況や文脈に合わせ、双方の言語を混合した使用する状況」が当事者にとって安定した状態と捉えられていると考えられる。

言語選択ではなく、例えば「ストレートな表現」「簡単なレベル」のように言語のレベルの調整も見られた。また、当事者側からの調整も見られた。複言語サポーターと当事者は、言語選択だけではなく、状況や文脈に応じて双方向に言語レベルを調整しながらコミュニケーションしているといえる。また、完璧な言語能力ではなく部分的な能力も活用していることがわかった。

このように様々な状況や文脈に応じて複言語サポーターが複数の言語を駆使しながらサポートしている様子が見られたが、「当事者との関係」「複言語サポーターとしての関係」の二重の関係の間でジレンマを感じるなど、その仕事の難しさや限界を感じるという語りも見られた。複言語サポーターはこのようなジレンマも時には感じながら仕事をしているといえる。

参考文献

西山教行 (2013) 「『ヨーロッパ言語共通参照枠』の考え方：5つのキーワードから考える」『大阪樟蔭大学 英語と文化』第3号, 31-36 大阪松蔭大学